



**合板の可能性を追求
国産材活用にも注力**

合板と聞いてどのようなイメージを浮かべるだろうか。合板とはその名の通り、薄く剥いた、板を接着剤で貼り、合わせて、作った木の板。かつては製造工程の精度や接着剤の品質の悪さなどが原因ではがれやすかったため、一部では粗悪な印象が抱かれていた。

しかし、その後製造技術が進化し、強くて幅があり、伸び縮みの少ない優れた材料へと発展。建築物の壁や床、屋根の地下などの建材として使う目的で製造される構造用合板は、目に見えないところで多くの建築物を支えており、その厚みや強さは使用箇所によってJAS規格で厳しく定められている。《島根合板株式会社》常務取締役の荒木裕二生産本部長(52)は、「大手ハウスメーカーが採用するツーバイフォー工法など、建物を面で支える建築は高性能な構造用合板が大きな役割を担っているのです」と紹介する。

高度経済成長期真っただ中の1964年、前身の会社が益田市内で創業。グループ会社との合併などを経て97年、現在の地にスギやヒノキなどの針葉樹に特化した工場を開設する。従来日本では安価な輸入広葉樹

が多く使われていたが、世界的に森林保護の意識が強くなるとともに国産材活用促進などの機運も高まってきていた。同社では、使用する木材の約90%を国産材が占めるなど、地産地消を推進。豊富な森林資源を有効活用し、山林を整然と維持管理することは洪水や土砂災害の防止にもつながり、CO₂削減にも寄与する。

合板の製造工程は大きく四つに分かれる。始めに、原木を大根の柱むきのようにミリ単位で薄く剥く。次に、温度や湿度、風速や風量などを調整しながら、木に含まれる水分量を10%程度にまで乾燥。その後、層の向きを交互に重ねて接着させていき、カッティングして最終検査に入る。一枚一枚十分に乾燥させた薄板を繊維方向に直交させているため、あらゆる方向からの高い耐久性を発揮する上、無垢材と比べて伸び縮みも少ない。「木は産地や種類などによって一本一本異なる上、加工時の気温や湿度などにも影響されるため、どの作業にも高度なテクニックが求められます。そうして木材の優れた特性をより高めた建築資材が合板なのです。一本の丸太から広い面積の材料を得られるため、無駄が少なく、地球環境にもやさしいんですよ」と荒木本部長は語る。

木材の性質を兼ね備えつつ、耐久

しまねごうはん
島根合板 株式会社

サステナブルな社会に向け
日本の林業や地球環境に貢献

09
LEADING COMPANY



島根合板 株式会社

事業内容

合板製造販売業

創業 昭和39 (1964) 年11月28日

代表者 代表取締役 又賀 航一

社員数 190名(男178名 女12名)

本社 島根県浜田市治和町口895-2

電話 0855-27-1625

採用エリア(勤務地)

浜田市

採用区分

新卒採用

キャリア採用

採用担当者からあなたへ

私たちは合板の製造・販売を通して、地域あるいは人々の暮らしに貢献し、自分自身を成長させることができます。挨拶がしっかりとでき毎日元気に仕事に取り組む人を求めています。優しくて面白い先輩社員が全力でサポートします。工場見学いつでも大歓迎です。



総務・人事・経理本部 主任
湯浅 崇裕さん

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

0855-27-1625

採用直通 E-mail

yuasatakahiro@nisshin.gr.jp

公式サイトはこちら



リクナビはこちら



マイナビはこちら



緊張感を持って製品を調整
同僚とのコミュニケーションも大事

さまざまな用途に合わせ、多種多様な材料や方法で加工される合板は、JAS規格で品質や形状などの基準が定められている。その基準に合致するように確認したり、調整したりするのが、製品の仕上げを担当する生産3課の役割だ。接着作業を担当する宮本さんは、「1.7秒ごとに自動で下りてくる板を、向かい合った2人1組で確認しています。わずか1ミリ、2ミリでもずれを見つけたら機械を止め、調整する必要があるの、緊張感が求められます」と話す。製品の高品質を維持するには適切なチェックが不可欠で、2時間おきに休憩し、集中力を切らさないよう作業に向かう。「気を張り詰め過ぎてダメ。歌をうたったりしてリラックスしながら作業しています」と屈託ない笑顔を見せる。機械のトラブルなども少なくないが、同僚とコミュニケーションを取りつつ迅速に対応している。

高校卒業後、同社に入社した宮本さん。決め手の一つは、待遇の良さだったという。「同級生と比べても大分給料が高くていいのですが、その分、弟や妹にいろいろねだられています」と苦笑するが、その表情にはどこか満足感がにじみ出ている。



生産3課
宮本 紅麗さん(21)
2021年入社



出荷前の合板品質をチェック
快適な社員寮生活でエネルギーチャージ

奥出雲町出身で、大学では酒米の研究をしていた内田さん。「県内屈指の業績を誇るとともに、環境循環型社会の実現にも向き合っている会社だと知り、興味を持ちました」。故郷で農業関係の仕事に携わりたいと考えていたこともあり、森林の成長や再生にも注力している当社は魅力的に映った。

約半年間の現場研修を経て、品質管理課に配属。薄い単板をいくつも貼り合わせている合板にとって、特に重要なのが接着性能の確保だ。内田さんらは、煮沸したり、両側から強い力で引っ張ったりするなどの試験を繰り返し、単板がはがれないかを確認。「減多にないことですが、接着剤の付け忘れや量が少ないなどの理由で不具合を見つけることも。お客様のもとに不良品を届けたくない気を引き締めています」。剥離試験や接着試験のほか、一本の原木がどれほど製品化しているかを調べる歩留まり試験や単板の水分量を量る含水試験なども担っている。

入社の際に新設された社員寮に居住。「ホテル並みにきれいで住み心地も抜群。職場に近く、家賃は格安で助かっています」



品質管理課 班長
内田 将人さん(25)
2021年入社



1 木々に囲まれるようにして建つ島根合板の工場。同社には、原木の入荷や製品化した合板の出荷などでひっきりなしにトラックが往来する 2 「合板製造には高い技術力と扱う人間の繊細さが求められる一方、IT化自動化の推進で力仕事は随分減りました。誰でも頑張ることができる職場です」と話す荒木常務取締役・生産本部長 3 最大直径約70センチの原木は、大根の柱むきのように数ミリ単位の薄い板に削られる 4 2021年に新設された社員寮。全部屋Wi-Fi完備で、バス・トイレ別、サンルーム付きと快適な環境だ 5 自社配合の接着剤を塗布してプレス。単板と単板をつなぎ合わせる接着工程は、合板の要だ 6 女性社員が安心してつろげるよう専用の休憩室も設置

性に優れ、コストも抑制できるなど多くの優れた特徴を持っていることから、今や下地や型枠だけでなく、内装や家具、什器にも使われるなど魅力的なアイテムとして注目されている。同社でも石こうボードに代わるものとして、より軽く強度のある内装用ライナー合板、フロア材の下地として使うフロア合板などを製造。現在は非構造用合板が合板総生産量の約2割を占めている。

**社員による植林活動推進
地球未来牽引企業に認定**

持続可能な社会への貢献活動も熱心だ。浜田での操業当初からグループ会社が所有する山林での植林活動を実施。入社3、4年の若手社員が2泊3日で山に入り、下刈りから間伐、苗木の植栽までを行い、森林再生の一端を担っている。

工場では、合板製造の過程で発生した端材などの木質バイオマスを熱源として活用。燃料となる木材は成長過程で二酸化炭素(CO₂)を吸収しているため、燃料として燃やす時にCO₂を排出してもプラスマイナスゼロとなる。エネルギー面においても環境を意識しているのだ。

2017年度には単板乾燥時に排出されるガスをほぼ純粋な水蒸気に近い状態に浄化可能にする燃焼装置を

設置。同年には経済産業省の「地球未来牽引企業」に認定された。

日新グループの国内シェアは30%超。2工場が稼働し、合板製造の中心を担う同社には、九州地方や島根県東部など遠方からの就職希望者も少なくない。そこで21年、全部屋Wi-Fi完備で、サンルームも付いた快適な社員寮を新設。共用室にあるマッサーシエアや筋トレマシンを備えたトレーニングルームは、社員であれば誰でも利用できるといふ。

また、社内の休憩スペースもリニューアル。平屋だった建物を2階建てに増築し、横たわることが可能な畳のスペースやリクライニングチェア付きの個室も新設した。女性や外国人社員も増加傾向にあることから、男女兼用スペースに加え、女性専用の部屋も併設した。荒木本部長は、「かつては力仕事のイメージも強かった合板製造現場ですが、今や工場の自動化やIT化が進み、どんな人でも働きやすい職場になっています。部署によっても仕事内容はさまざまで、一人一人の適性に応じた働き方ができるはず」と話す。

木材より強くて幅が広く、伸び縮みが少ない合板は、建築物の下地から内装などまで今や暮らしに欠かせないアイテムの一つ。その魅力を再認識できる会社だ。